

保育のヒント～「科学する心」を育てる～

他園に学ぶ

他園の公開保育や研究発表会に参加される機会はありますか？

「他園に学ぶ保育者研修[※]」は、本年度よりソニー教育財団が実施している助成制度です。

発表会・研究会の公開保育・実践発表・協議会・講演から学んだことを、研修者に「研修レポート」にさせていただきました。今回は、研修者の声をご紹介します。この企画は次年度も実施の予定です。皆さんも、他園の保育から、「科学する心」を育む保育について考えてみませんか？

「他園に学ぶ保育者研修[※]」とは、「科学する心」をテーマに取り組みられている幼稚園・保育所・認定こども園に所属する保育者の方々が、他園の保育から学び、主題の理解を深め、自園の保育の質の向上に繋げていく研修に参加する機会を支援するため、2016年度よりソニー教育財団が実施している助成制度。



● 保育者研修

✦ 最優秀園実践発表会／幸田町立大草保育園にて実施

● 最優秀園実践発表会 概要

- 研究主題：
出会いから始まる科学する心～子どもの好奇心に寄り添う保育～
- 講師：
大豆生田啓友氏／玉川大学大学院 教授
「好奇心からはじまる科学する心を育む保育」
- 内容：
公開保育・研究発表・協議会・記念講演
- 当日の様子



- ▶ [大草保育園 最優秀園実践発表会 開催速報](#)
- ▶ [大草保育園 最優秀園実践発表会 開催レポート \(PDF\)](#)

● 研修レポートから抜粋

展示物の中に子どものつづやきを書きとめているものがあり、先生方が子どもたちにどんな思いで向き合っているのか、自分の保育を改めて振り返る機会になった。また、「綿の種」を分けていただき、早速、5歳児に種の話をして、プランターに蒔いたところ、芽が出てきている。テーマにある「出会い」が繋がっている。

保育者の皆さんが、子どもの声をたくさん拾いながら保育を進めている。竹を使った保育の展開や子どもたちが作った石釜を使ったピザ作り、園庭の側にある森など、環境をうまく活用して、“子ども主体のワクワク保育”をしているからこそ、子どもたちの「ハテナの心（＝科学する心）」が育っているのだと思った。

講演を受けて、今、子どもが何に興味を持っているのか見取り、大人の感性を押しつけるのではなく、

公開保育の場面を、画像とエピソードを交えながら紹介していただく中で、どこを視点に遊びを見取る

子どもが「こうしてみよう」「なんだかワクワクする」と思えるような関わりや環境構成を考えていきたいと思う。お聞きしながら、「子どもってすごい!」「毎日、好奇心いっぱいの子どもたちに関われる保育の仕事って素敵だな」と改めて感じることができた。子どもの不思議に思う心、やってみたいと思う気持ちを大事にしながら、日々の保育に向き合っていきたいと思う。

のか、子どもの思いにどう寄り添うのか等、具体的な場面から学ぶことができた。「子どもと一緒に真剣に話し合う、“子どもと保育者”“保育者同士”の関係性ができていること」「大人の感性を押し付けないこと」「偶然を最大限に生かす保育」「異年齢保育の中で、教えなくても年上の子を見ていて育っていく姿」などが分かった。子どもが見ている世界を共に見ようとする大人の存在があり、応じてくれる人がいる。「自分の大好きな世界」「夢中になれる世界」を理解してくれる人がいることが、自尊心や自己肯定感に繋がっていくことを学んだ。

✦ 最優秀園実践発表会／社会福祉法人晴朗会すくすく保育園にて実施

● 最優秀園実践発表会 概要

- 研究主題：「科学する心が育まれる場面を捉えて考察する」
- 講師：記念講演 秋田喜代美氏／東京大学大学院 教授
「科学する心」を支える保育者の在り方
指導講評 瀧川光治氏／大阪総合保育大学 教授
- 内容：公開保育・研究発表・協議会・指導講評・記念講演
- 当日の様子
 - ▶ [すくすく保育園 最優秀園実践発表会 開催速報](#)
 - ▶ [すくすく保育園 最優秀園実践発表会 開催レポート \(PDF\)](#)



● 研修レポートから抜粋

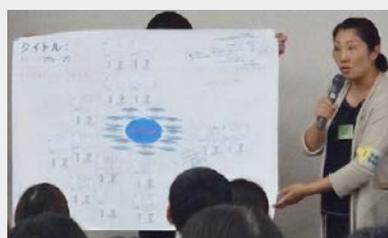
全体会場に掲示されていた、「科学する心が育まれる場面を捉えて考察する」メモに全職員が取り組んでいる様子がよく分かった。子どもの姿を捉えて考察する姿勢は、クラス環境や園内環境にも反映され、職員だけでなく子どもたちにも見えるように工夫されていることが興味深かった。遊びの課程、足跡の見える化の方法として参考になった。

子どものネガティブに捉えがちな行動も、9つの視点で見ると「これは好奇心に当てはまるのでは?」と考えると、次の環境の工夫に繋がり、ポジティブな方向で保育を展開していけるとの園の先生のお話が印象的だった。

保育を参観する中で、自身が捉えた“科学する心が育まれる場面”を、当園の先生方が使用しているメモ用紙を用いて、グループ協議を行った。感じたことは、“同じ場面を見ていても、人により視点が違う”ということで、感じたことを伝え合う中で、様々な視点からの考察が出された。グループの方々の意見を聞き、同じ場面も、見る人により、様々な視点に立って考察できる素晴らしさを感じた。これは、今回の協議会で意見を出し合わなければ、気付かなかったことである。

指導講評では、話し合ったことにタイトルを付けることの意義、職員間で共有する子どもの姿の意義付け、子どもの姿の観察の仕方など、現場に活かせる内容を学んだ。園内の職員間の「連携」をどのように図るか指標となった。

講演では、「科学する心を育てる保育」で大切な“ワクワク感”について、当日の保育から、具体的に各年齢で大切にしなければいけないことや、保育者の関わり方、見える化・言葉化の大切さを教えていただいた。保育者自身が子どもと共に夢中になって遊び、子どもたちが今、何を楽しんでいるか、何を学んでいるかを見取って記録し、それを他の保育者と



共有し、園全体でチームとなって環境や必要な援助を考えて保育をしていく必要性を改めて感じた。



✦ 審査委員特別賞実践提案研究会／奈良市立都跡こども園にて実施

● 審査委員特別賞実践提案研究会 概要

● 研究主題：
「子ども自ら遊びを創る～もっとおもしろくにつながる保育者の関わりとは～」

● 講師：
記念講演 秋田喜代美氏／東京大学大学院 教授
「“もっとおもしろく”で広がる保育」
指導講評 横山真貴子氏／奈良教育大学 教授

● 内容：
公開保育・研究発表・協議会・指導講評・記念講演

● 当日の様子

▶ [都跡こども園 審査委員特別賞実践提案研究会 開催速報](#)

▶ [都跡こども園 審査委員特別賞実践提案研究会 開催レポート \(PDF\)](#)



● 研修レポートから抜粋

子どもたちが遊び込めていた。“もっと遊びたい”と思える環境が整っている。保育者自身も遊びを楽しんでいるからこそ、子どもたちに伝わるものがあると思った。保育者の関わり（見守る、認める、共感する、提案する）が子どもの姿を的確に捉えて、タイミングよくなされていた。

子ども同士の遊びの振り返りでは、今後の遊びについて、一つの意見にまとめるのではなく、それぞれの考えを試して決めていこうと話していた。保育者のこのような考えが、子ども主体の遊びに繋がっていくのだと思った。

「子ども自ら遊びを創る」とは、子どもが遊びに主体的に関わり、興味や関心を深め、「こうしたい」と、友達と共にイメージを共有して、試行錯誤しながら遊ぶ姿ということ。「『こうしたい!』と子どもの考えが出るまで待つ」との園の先生の話が印象的だった。

指導講評では、遊びの伝承に、さらに新しい要素が加わって遊びが面白くなっている。目指す子どもの姿を明確にもち、その育ちの道筋は、子どもと共に創っていく細やかさが重なって、登園の遊びがダイナミックになっていることを学んだ。

講演では、「遊びこそ21世紀に必要な創造性を育てる」とのお話があり、遊びに没入することで深い学びに繋がっていくこと、アクティブラーニングからディープアクティブラーニングへの方向性が新しい時代に必要な力となってくるということを知り、遊びを見る目や援助、環境構成の大切さを再認識した。また、環境構成の大切なポイントについて、園文化を大切に環境構成の工夫をし、

子どもを育てる（保育）ということとは「生きる喜びと希望を育てること」「挑戦することは、人生を面白くそれを克服する」「子ども時代に心の池が満たされると生涯枯れることのない泉となる」という言葉を心に留め保育に臨んでいきたい。

1. 十分にたっぷりたくさん用意
2. 動線を考えて設定
3. 目に付きやすいように置く
4. 子どもの関心や年齢に合った図鑑や絵本を置く
5. 選び試せる多様な素材の準備をする

ことを学んだ。

無断転載を禁ず。引用する場合は右記を必ず明記願います。「(C)公益財団法人 ソニー教育財団 ソニー幼児教育支援プログラム
幼児教育保育実践サイト <http://www.sony-ef.or.jp/sef/preschool/>」